

その夜の石田

人

石田治部少輔三成

同家臣島左近勝猛

同 倅 新 吉 郎

同家臣蒲生備中守卿舍

大谷刑部少輔吉繼

真田の使者穴山小助

武士、從者、厩の小者等

南宮山の巫女水箒

場——關ヶ原假陣場

時——慶長五年九月十四日夜のこと

その夜の石田

農家を假の陣場としたる様、床板を取放ちて出入に便したる箇所などあり。大雨のあとにて、まだ小雨霈し氣に降る、家の外面にて武士四人蕭條に焚火を爲し居る。

武士の一 何とであらう、明日の天氣は、

同の二 秋雨の定めはおざらぬ、小止みにはなつたれど、片時の先も占が置けぬ、降らば降らして置くまでや。

同の三 さりとは明らめのよい事の、合戦の最中の大雨は武者にはいかい禁物ぢやによ。

同の四 味方も困れば、敵方も苦むことぢや、代の草鞋に事を缺かねば、あにが篠突くとて大事がる、
結句面白い功名も出来やうぞ。

同の一 降らば降れ、長雨は恐れねど、寒いには辟易たむろぐよ。

同の二 火を焚いても煙は立てな、明しの見えぬ様にとある、大將の首取るよりも、難かしい仰せな！

同の三 寒いには火が何より、何の是れしきの焚火、敵方に漏れやう譯おさんない。

同の四 よし敵方が掛りをつけたら、味方も打物取る分ぢや。

同の一 あつたら武者が顛へるのは、醜うも見苦しいわ。

(向ふにて「すされ」行け「退け」など云ふ聲騒がし。武士等は何故やらむと訝る所へ、南宮山の巫女みすず、髪

を亂し、幣束を持ちて登場、あとより、士卒一人搦んで出づ。

士卒 物狂め、すされ、すされ。

(と袖を取つて引く。)

みすず なに物狂にすされとか、すさるまじ、すさるまじとよ。

唄

月の夜も、降れば暗がり、くらまぎれ、目先も分かぬ暗まぎれ、はつちや恐もの、茄子に
瓜をならせうとや、熟るかならぬが、畑を見さい、心の闇に目も曇る、迷ひ惑ふぞ悲しけ
れ、南無大日如来佛薩陀。

武士の一 この狂女は何處のものぞ。

みすず 自らは南宮山の巫女にて候。

武士同 巫女ならば神には使へで、陣中へは何しに來たぞ。

みすず われも知らねど。

唄

うかれきて、あれあれ東が白むは日輪の升るなり、西の暗いは、いよきて山の端に月輪の
沈むよの。

その夜の石田

武士の二 唄ふ歌にも事を缺き、どうやら東を顛負する狂女。

武士の一 追出せ、追出せ。

武士の三 すされ。

武士の四 どけ。

みすず いいや退かじや。

唄

退くまじや、退けとは禁句はばかりの、軍の場などされば、おしやる、おしやる、など

おしやる。

武士の一 ええ面倒な、括してしまへ。

(武士等手取り、足取り、みすずを奥の方へ引立て行く。)

(鳥左近物蔭にて狂女の様を垣間見たる心にて登場。焚火盛んに燃上るを見て踏み消す。)

左 近 今まで数度の合戦に出遇ひ、生死の街に逍遙なしても、夢愕かぬ勝猛が、小耳に放れぬ狂女のさ

れ歌、齡に連れて心まで、少しは年を取つたと見える。

(士卒一人登場。)

士卒 左近様、信州より御使者でおさる。

左近 眞田殿よりの使者とや、御通し申せ。

(士卒下場、眞田安房守の使者穴山小助登場。)

小助 左近殿。

左近 珍らしや小助殿、如何致して御發向ぢや。

小助 姿にそれと知ろし召れん、亂軍の中を使者に立つたわ。

左近 近頃稀有の御姿な！ いざ是れへ通られませい。

小助 さらば御免あれ。

(左近小助能き所に着座す。)

左近 先づ火急に伺ひたきは、房州御身の上、如何渡らせらるるぞ。

小助 無事でおざる。

左近 さらば明日の合戦に、仙道方は間に合ふまじ。

左近 如何にも江戸の加勢の人数は我等の手にて食留め申した、主人申すは、今度の一戦、既に兩三日の間ならむ、昌幸かくて在るからは、仙道よりの加勢は、一人たりとも通すまじ、これを土産に御見舞に罷り上つた。

左近 有難し、この由主君へ申上う。

その夜の石田

小助

御披露を頼み入る。

(左近の替新吉郎駆け来る。)

左近

新吉、何事ぢや。

新吉

親人、島津殿には唯今御陣を据ゑられまいた。

左近

して宰相殿には。

新吉

未だ到着なりませぬ。

左近

掃部が居るに何たる事ぢや、なほ御着あらば聞かせくれい、また備中殿へも、此由を御知らせ申せ。

新吉

畏りました。

(新吉郎下場。民家の奥より石田三成登場。)

三成

左近、島津公には着せられたとか。

左近

唯今御陣を据ゑられたと申します。

三成

遣がは早雄の薩州、勇ましいのう。

左近

御意御座ります。さて房州殿の御使、唯今到着されまいた。

三成

外ならぬ小助男、さては大事の便か。

小助 唯今となりては十日の菊、對陣あまりに長き時は、味方は云はば集り勢、變あらんも計り難し、一刻も早う御驅合を迫き立ての使者におざりまいた。

(小助誓の中より、生絹の小切を出して左近に渡す、左近は三成に捧ぐ。)

三成 過ぎる程の用心をせられたの、なになに委曲は使者に申含め候恐恐、昌幸判、宛名も書かぬ真田の狡さよ。

小助 今の折から拙者が身體を、消息代りとおざりまする。

三成 明日は愈よ大合戦ぢや。

小助 御籠りありし大垣より、打出たまひし御所存は。

三成 さればよ、昨今到着の敵方は、皆一夜陣を張り申す、人質に眼くらみ、大垣へ抑へを付けて、大坂乃至佐和山など、推掛うとの下墨と見た、さありては一大事、幸ひ、今日の小迫合に、思ふ儘の勝利を得たるは、味方の吉兆、此機を外さず總寄に、有無を一舉に付け申すぢやて。

小助 かの内府は若年より、弓矢取つては海道一の名大將、味方今夜の動轉を、曉られなば如何あるべき。

左近 されば夜を籠め、當地には陣を移した、御聞きやる通り、まだ浮田小西などは到着せぬほど、人馬には難儀ながら、宵の口よりの大雨に、松明もなく、密密と關が原へは寄掛けたり。

小 霧立つ山の木下閣、暗き森道に惑はざりしは、

左 近 それぞ兼ての用意とて、長曾我部殿へ申談じ、大篝火を徹夜、焚かせらるるを目處となし、牧田

道へは進み申した。

小 助 隙間なき御配慮かな、明けなば晴るる霧の間より、思も寄りぬ味方の勢、

左 近 驚く敵へ一發の、烽火と共に切てかからば、

小 助 叶はぬまでも鎗を削り、ここを必死と切結ぶ。

三 成 相圖を待ちつる南宮山の、藝州の大勢、安國寺、長束などの手の者は、内府が旗元の真中へ、

面を黒まし切て入らば、

小 助 譜第の本多井伊などが、如何に急るもその詮なく、

左 近 雪崩を打ちて白み渡り、

三 成 やがて内府が緞首に、見參に入らうするわ。

(士卒登場。)

士 卒 申上まする。

三 成 何事ぢや。

士 卒 大谷刑部少輔様、御越にごぞりまする。

三成 例の乗物ならん、其儘にて御通し申せ。

士卒 はあ。

(士卒下場。)

小助 合戦明日に極まる上は、我等とて長居は無益、急ぎ信州へ立歸り、此方よりの吉報を、受くると

共に關東勢を、唯一拉ぎに仕らむ。

三成 素より隙間のあらぬ房州倭むらじとてあるまじいが、なほ其上に心を付けられ、やがて愛たき對面の、

話し草を造り申さう、陣中といひ夜分なれば、返しの消息は認め申さぬぞ。

小助 畏つて候、さあらば御免。

左近 何分共に御頼み申すぞ。

(小助頷く、三成左近に送れと氣色す、左近立つて小助と共に下場。三成扇にて手を打ち人を喚ぶ、武士二名程

登場して、主の氣色を伺ひ、床几を直すことなどあり、その間に輿に昇かれたる大谷刑部少輔登場、惡疾のた

め眼癢たるうへ、面相を損じたるより、覆面したる儘にて輿を出でて座を定む。)

三成 病中も御厭ひなく、松尾山への御發向、近頃での大儀、御芳志過分に存じ申す、して彼人の様子

はな。

吉繼 あたりを遠ざけられい。

その夜の石田

三成 各には幕外へ出られて、四邊に心せられい。

一同 はあ。

(一同退出す、雨また降り出だす。)

吉 繼 あたりは。

三成 某の外には影もない。

吉 繼 さらば申そ、筑前の殿は夕顔と見たよ。

三成 夕顔とは。

吉 繼 昨日は昨日、今日は今日、風に任せてふらついておざるわ。

三成 裏切りとまでも極まらぬぞな。

吉 繼 我が黨に旗を立て、伏見を攻落したる小早川、それがあの爲體（ぶたぐみ）にては、十が九つまでは裏切りかな！

三成 當の大將秀秋は恐るる敵とも思はぬが、名だたる家老も多かるに、八千の人数あり、もし敵と見ば、如何なる備へを立つべきぞ。

吉 繼 異心は無しと某に、言葉を番へはしつれども、見えぬ眼に讀みたる心中、なにへろへろの筑前勢、合戦の間の一日半日、拙者が手の者千二百にて、山の麓に陣を張り、身動かしをさせ申さぬわ。

三成 此上は何分共、御身が働きを願ふばかり。

吉繼 事の始めに止めはしたが、聞入のない今度の企、(天、)命は友垣の、情に御身に参らせた、吉繼息のあるうちは、松尾山の旗色など、内府に弓引く大軍、大事の心に掛けさせられな。

三成 御身の請合心易し、此後は明日の運ぢや。

(家の一隅に雨漏りて音激しく聞ゆ。)

吉繼 水の音な。

三成 古びた家で雨漏が致す。

吉繼 雨が漏る!

三成 草も朽つれば雨も漏らうで。

吉繼 いかさまのう、雨漏には桶などを受けに並べうまで。

三成 降り止むまでが大事ぢやわ。

吉繼 降り止むまでが命ぢやわ。

(新吉郎駆け来る、家臣留む。)

家臣 御奥にては密談とおぢやりまする。

新吉 さらば是れより御意得申さう、なうなう御主君、小西殿には今方御着陣にござる。

その夜の石田

三成 うむ攝州がわたられたか。

吉繼 さらば我等も陣所へ歸らう。

(吉繼立つ、三成は吉繼の手を取り。)

三成 東白まば御邊も我も、生死の巻の關が原、勝利を得なば此世の對面。

吉繼 俄か旨めしの刑部なれば、討死致さば三途の河原で、御身の顔を見るであらうよ。

三成 何れにしても逢ふぢやまで。

吉繼 何れにしても逢ふであらう。

二人 むははははは。

(三成扇にて手を打つ、新吉郎及び家臣等幕外より入り來る、吉繼は輿に乗る。)

三成 御見送り申せ。

吉繼 是れは造作に預るよ。

(三成の外、一同下場、烏左近、蒲生備中と共に上手より登場。)

左近 是れにおわせられましたか、して粗増かたは如何いかでござりましたな。

三成 おう散散ぢや。

備中 すりや裏切か。

三成 なに、大事の前の小事、大谷一手にて引受うと申したわ。

左近 目こそ晦けれ、彼殿が采取つて下知なさば、いかに多人數なりとても、小早川が勢どもを支へるには過ぎものなり。

備中 其間に當の敵を竭くさば、筑前勢は風前の燈と共に消え申さん。

(新吉郎登場。)

新吉 はつ浮田殿愈よ御着相成りまいた、先手は掃部殿にござりまする。

三成 宰相にも着かせられたか、某、島津、小西、浮田、よし小早川を敵と見ても、大谷、脇阪、戸田、木下、また南宮山のあなたには、毛利、吉川を始めとし、長束、安國寺、長曾我部、正奇の二道を一發の烽火と共に切入るべき、手段は既に定めたり。

左近 兼て直江城州と御申合せ圖に中り、愈よ明日は、天下を争ふ大軍。

備中 味方の段數、敵の切れ數、合せて二十萬餘の大軍、恐らく日本始まつての勝負、心地よい事になりましたわ。

三成 大閤殿下の御跡を、手を濡らさずして握り込む、江戸の内府の腹黒さ、取つてよい天下なら、我等が取るも支はあるまい。

左近 所詮軍は雙六の、丁と出るか、

備中 半と出るか、

三成 賽の目が業をするまで、左近、備中、大博奕のう、むはははは。

(この前より雨は降り止み空明るくなる。)

新吉 親人、あれ御覽ぜよ雨は降り止み、雲の拗うづの合間より、薄るる光は月輪の、現はれたまふと覺へたり。

左近 明日は天氣ぢや。

備中 戦ふにも榮があるわ。

左近 久振にて内府公が、押付を見るであろ。

備中 夜明けるにも時があるまい、御分も我等も陣所へ罷らう。

左近 さらば殿。

三成 方方。

(三人下場、蟲聲起り月出づ、向ふにて騒がしき音して、三成が乗替の馬飛躍し來り、三成を見て立留る、三成は不審す、厩の小者後を追ひて來る。)

三成 如何致いた。

小者 暗紛れの道中に、御乗換に付添ひましたる舎人、川の深みへ陥込んで、其儘に成りましたに、驚い

たと見えまして、止むる鼻綱を引き切り、一散に飛び出しましたが、逸れずに陣所へ入りました。

三成 深みへ入つて命を捨てたと。

小者 左様でおざります。

三成 既小者の常ながら、足許を顧みぬ不覺、不便な最期を致し居つたな、馬は裏手へ繋ぎ置き。

小者 はあ。

（小者馬を引きて下場。狂女の謠遠に聞ゆ。）

唄

月は出でて心は曇る、闇に迷ふは誰そや、いぢらし。

三成 悉く手配は濟んだ、舎人は失せても馬は歸りぬ、筑前が心變りも、勝利の後の料理には、便りよ

き事もあり、天下は廻る水車、かの徳川を追うか迫かぬか、明日の合戦の待遠しきよ、唯十二時に日本は、我が腕かむなにて美濃地のほとり、關が原へは縮め置く、人の力は限りを極めぬ、唯この上は天道の、奇しき轍の痕を軋らむ。

——幕——

大正十四年二月一日印刷
 大正十五年八月五日再版
 大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集
 第三卷



著者
 發行者
 印刷者
 印刷所
 發行所

(非賣品)

松居松翁
 高安月
 山崎紫
 伊原青々
 岡鬼太郎園紅

東京市麴町區內幸町一丁目六番地
 中塚榮次郎
 東京市下谷區二長町一番地
 守岡功
 東京市下谷區二長町一番地
 凸版印刷株式會社

東京市麴町區內幸町一丁目六番地
 國民圖書株式會社
 電話銀座二一八八番
 振替東京五二二九八番